日本労働年鑑　第26集　1954年版
The Labour Year Book of Japan 1954

第一部　労働者状態

第五編　労働者の生活

第二章　栄養

第一節　国民栄養調査

厚生省公衆衛生局の「国民栄養調査」の結果によると、東京都における非農家世帯一人一日当りの栄養摂取量の推移は第165表の通りである。なお、五二年五月に集計方法に変更があつたため、それ以後は六大都市の平均数である。

（註）「国民栄養調査」は一九四六年以降、毎年二、五、八、一一月の四回行われる。それは「国民栄養の実態を把握するため」のもので、「国民の身体にどんな栄養的な欠陥があるか、どれだけの栄養量を攝取しているか」などについて調査される。したがつて特に労仂者世帯を対象として調査されていない。

すなわち、五二年では熱量一九五五ないし二〇五六カロリー、蛋白質六七ないし七〇グラムとなつており、熱量、蛋白質ともに僅かながら年々増加の傾向を示している。これを食品群別にみると、主食類における米摂取量の増加並にそれに伴なう麦類摂取量の減少、そして動物性食品の増加が著しい。しかし、日本標準所要量（熱量二一五〇カロリー、蛋白質七五グラム、脂肪二五グラム）と比較すると、この標準量を下廻り、都市における食生活が終戦直後に比べて目立って改善されたといわれるものの、いぜんとして低いことを示している。

次に食品群別栄養摂取状況の推移は第166表の通りである。五二年五月以降における集計方法変更のため、二月の数字を五一年平均と比較すると、主食類では米摂取量二九グラムの増加が注目され、大麦、小麦（小麦粉を含む）の摂取量は、反対にそれぞれ三・八グラム、二〇・三グラムの減少となつた。

砂糖類の摂取量も二・二グラムの増加を示し、また動物性食品も魚介類四・二七グラム、肉類三・二グラム、卵類二・六グラムと、それぞれ増加して、動物性蛋白の摂取量増加をもたらしている。その外、豆類および同製品、野菜類もそれぞれ約一〇グラムの増加であるが、果実類のみは約三〇グラムの顕著な減少を示している。

日本労働年鑑　第26集　1954年版
発行　1953年11月20日
編著　法政大学大原社会問題研究所
発行所　時事通信社
＊＊＊＊年＊＊月＊＊日公開開始